

沖縄における生活小径（スージグワ）の変容過程と再評価に関する研究

代表 清水肇（琉球大学工学部環境建設工学科 助教授）

委員 地井昭夫（広島国際大学社会環境科学部住環境デザイン学科 教授）

委員 小野尋子（琉球大学工学部環境建設工学科 助手）

〔研究報告要旨〕

沖縄における伝統的な道の特徴を継承するスージグワについて、その変容過程、集落共同体による復興とコミュニティルール、スージグワの特徴を継承する集合住宅計画の特徴と意義、発展方向、そして、スージグワをいかに保全するまちづくりの実践例の検証に関する調査を行い、以下の成果を得た。

①戦後の南風原町の事例調査から、沖縄戦後の地域住民の自力による集落空間復元の過程において、元の宅地形態を継承しつつ、道路が復元された経緯があったこと、一部において道幅等に関するコミュニティルールがあり、そこにスージグワに対する共同意識が投影されていたことを明らかにした。

②南風原町兼城の調査から、道と敷地の関係が次第に閉鎖的なものになり、スージグワ的性質が次第に失われてきたこと。その要因としては、庭の有効利用のための敷地の平坦化と擁壁の築造があり、これに宅地分割による敷地の小規模化、道路際への増築などが加わって閉鎖化が進んでいる。

③宮古島市の公営住宅団地、平良団地低層棟と馬場団地の両方から、公私の中間領域を計画的につくりだすことの意義と課題を明らかにした。今後の集合住宅設計で、さらに新しい展開が可能であると考えられる。また、整備にあたっての論点がまちづくりレベルと共通している。とくに生活行為を住戸内外にまたがるものとしてとらえることと、住み手が手を加えられる空間をつくることが重要である。

④那覇市首里金城町のまちづくりの事例から、道路幅員を有効幅4mの路面を確保しなくても建築基準法を満たす方法について経緯と根拠をまとめ、今後の応用の可能性を整理することができた。道路網の体系、道路断面、歩行者用道路の活用、地元での合意プロセスにおいて、今後の細街路を含んだまちづくりで参照されるべき内容を多く含んでいる。